



| | |
|------------------|---|
| Title | 日本の都市部に嫁いだ中国人女性の結婚の動機：時代による変化の視点から |
| Author(s) | 張, 月 |
| Citation | 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 135, 57-75 |
| Issue Date | 2019-12-23 |
| DOI | 10.14943/b.edu.135.57 |
| Doc URL | http://hdl.handle.net/2115/76403 |
| Type | bulletin (article) |
| File Information | 07-1882-1669-135.pdf |



[Instructions for use](#)

日本の都市部に嫁いだ中国人女性の結婚の動機

—時代による変化の視点から—

張 珩*

【要旨】 本研究では、日本の都市部に嫁いだ中国人結婚移住女性の結婚の動機について、時代ごとに動機の特徴を把握した上で、時代の推移に伴い動機がどのように変化してきたかを考察し、その変化をもたらした原因を探求する。調査の結果から、2000年代の時期において、離婚の経験、貧困の事情が直接的に、あるいは愛情を通して間接的に結婚の動機に影響する。この時期、離婚の急激な増加に対し、世間の意識が離婚の増加に追いつかず、離婚に対しマイナスのイメージを持っていた。更に、離婚だけではなく、連れ子がいる女性の場合、再婚の際、家族関係の維持も更に困難になっていた。このような女性は、日本人男性の連れ子を受け入れる優しさに魅力を感じ、結婚に至った。更に、2000年代の国内の経済状況に関して、中国社会は小康社会の基本達成から全面的達成に向かう途中であった。生活水準が小康に達していない人が存在するのも不思議ではない。このような改革の恩恵を受けていない人の中には、離婚の経験を持つ人や、離婚をして連れ子がいる人も存在した。このような女性たちは中国での再婚が困難なこともあり、状況改善を図るため、国際結婚の道を選ぶこととなった。

【キーワード】 結婚の動機、愛情、離婚の経験、貧困

1, 問題の設定

国際移動が頻繁に行われるようになった今日、国際結婚は珍しい存在ではなくなり、私たちの周りでも日常的に発生しうる身近な事柄となってきている。厚生労働省が2018年に発表した人口動態統計によると、日本における婚姻件数は年間606,866組（2017年）であり、そのうち国際結婚は21,457組で、30組に1組は国際結婚である。2017年の国際結婚の内訳を見ると、日本人男性と外国人女性による結婚は14,795組で、国際結婚の7割近くとなっている。さらに、妻の国籍を見ると、夫日本・妻中国による国際結婚の件数は5121件で、日本人男性と外国人女性による結婚の中で一番多く、全体の34.6%を占めている。中国人結婚移住者は90年代に入ると増えはじめ、1997年から2017年まで（2006年はフィリピンに次いで2位）日本人に嫁いだ外国人女性のトップになっている（2018年厚生労働省 人口動態統計）。

そこで、日本人男性と結婚する外国人女性のうち、1997年から2017年まで（2006年を除く）の20年間首位となる中国人女性たちが、中国の激しい経済成長を経験していくなかで、彼女たちの結婚の動機にどのような変化が起きているのかを検討したい。

2. 先行研究

1980年代、東北地方は日本人男性とアジア女性による国際結婚の先鞭をつけた。それ以降、人権問題との関わりから、アジア人「花嫁」を対象とする研究が多く誕生してきた。これらの研究は主に国際結婚移動の要因と移動した後の段階における適応の問題をめぐって展開された。本稿ではこれらの研究の中で結婚の動機を論じる内容を参考にしたい¹。

日本の東北農村の「外国人花嫁」に関する研究では、結婚の動機は格差ゆえの「よりよい暮らし」への願望（宿谷 1988）、「アジア諸国の女性にとって、日本の経済力との格差が結婚の動機」（佐藤 1989）であり、中国人妻に関しては、経済格差を根本的原因とする金銭崇拜（葛 1999）があるとされ、雑誌記事などにおいても、「経済格差の存在や日本の暮らしやすさ」（加藤 2004）こそが中国人女性の結婚動機だと論じられてきた。しかし、これらの動機に関する評論は実証的な研究が根拠にあるわけではなく、自明なものとして挙げられているものにすぎない（郝 2010）。

一方、実証的な研究も現れてきた。賽漢卓娜（2011）は中国農村部出身の結婚移住女性3人と都市部出身者1人の来日に至る経緯を紹介し、送り出し社会における国際結婚のプッシュ要因について主要因と副次要因、さらに媒介要因を見出した。主要因は経済的要因とジェンダー的要因である。経済的要因については、農村出身の3人が全員恵まれない経済状況から脱出し、裕福に暮らせる日本に憧れていた。出身地域においては、柱となる産業がほとんどなく、伝統的な農業に頼っているが、そこから得られる収入は限られている。農村部の人々は家族を養うため、農業以外の収入で家計を補うことを余儀なくされる。一方で、経済改革によって都市部及び東南部沿岸地域は急速に繁栄し、農村部との格差はますます開いている。現行のこの傾斜的な政策のもと、都市人がより利益を得、裕福になる機会を手に入れている。そのため、億単位ともいわれる農村出身者が故郷を離れ、大都市へと出稼ぎに行く。3人のうち2人が家計を助けるため経済先進地域への出稼ぎを経験していた。このように、この3人のプッシュ要因として、日本と中国の間の経済格差が認められるだけでなく、出身国国内の格差が存在していることが明らかになった。中国国内の格差が維持される背景としては、現行の中国戸籍制度により、農村出身者は長期にわたって居住しても都市の一員としての地位が得られないことがある。このように、制度によって経済的な国内格差を維持し、人為的に国民を二分することが、彼女たちを中国社会で「周辺化」させていると指摘した。

ジェンダー的要因は、中国家父長制的ジェンダー要因と新国際分業におけるネオ家父長制的ジェンダー要因に分けられている。中国家父長制的ジェンダー要因が最も典型的に現れているのは男尊女卑の観念である。中国の農村においては人力に頼る伝統的生産方式を取っていることが多いため、女性は男性に比べ働き手として劣るという考え方や、また男性の家系を大事にすることで血族間のつながりを保とうとする考え方が存在する。女性は特に農村部ではあまり役に立たないという考えが根強い。また、男子優先の文化の中、女子の場合容姿が重要な価値を有することや年齢も女性の価値を決める要素となることなどで、「格好悪い」女性、「適齢期」を過ぎた女性は男性のほうから敬遠するようになり、周辺に追いやられるの

1 結婚移住女性の生活実態、適応の問題については別稿で検討する。

である。

国際分業におけるネオ家父長制的ジェンダー要因²については、新しい雇用形式により伝統的労働構造が解体するのみならず、女性たちと出身共同体との間に「文化的隔たり」を生じさせる。都市部での長期間にわたる出稼ぎは出身社会から切り離される現状を作り上げる問題が生じている。この雇用がもたらすもう一つの重要な問題は出稼ぎ女工の配偶者選択の困難さである。都市部男性は、戸籍による制度的地位、経済的地位、学歴等の点で下位に置かれている農村部出身の出稼ぎ女性を回避するもしくは見下す傾向がある。

副次要因としては憧憬維持のメカニズムが挙げられる。「国際結婚」への選択は一見主体性を持った選択であるが、実際には先駆者が日本に関するポジティブな情報のみを故郷に伝達することにより、それに続く、その故郷の女性は日本への憧憬を抱いて来日することになる。しかし、彼女たちもまた、「面子」によってネガティブな情報を遮断していくという悪循環が生じるのである。

最後に媒介要因として、国際結婚紹介所の働きは軽視できない。仲介業者は国内で周辺化され続けた女性に対し、まるで日本人男性と結婚することで「中心」に位置づく機会を獲得できるように働きかけている(賽 2011)。

これに対し、郝(2010)は、社会関係資本³と個々人の人生経歴から生まれる結婚要因(経済的要因、適齢期になったこと、離婚したこと、主体的要因)との相互作用を考察し、その結果、個々人の結婚動機が社会関係資本と結びついて初めて国際結婚という選択肢が生まれてくるのであると指摘した(郝 2010)。

以上の研究とは異なり、中澤(1999)は量的調査を通し、国際結婚によってアジア地域(フィリピン、韓国、中国)から山形県最上地方に「嫁入り」した外国人妻の意識と実態に焦点を当て、調査を行った。その結果、国際結婚の動機で高い割合を示した項目は、中国・台湾出身者の場合①日本は経済が発達しているから、②夫の魅力(人間性・性格等)に惹かれたからであった(中澤 1999)。

ところで、従来の研究は中国人女性の結婚動機について、日本の農村部に嫁いだ女性を対象として、検討してきたという特徴をもっている。しかし、以前から日本人男性と中国人女性の結婚は都市部でも少なくなかったことに注意する必要がある。2017年の夫婦の国籍別都道府県別婚姻件数をみると、全国で日本人男性と中国人女性による国際結婚の件数が5121組であり、21大都市で、その件数が2152組となり、全体の42%を占めている(2018年厚生労働省 人口動態統計)。2007年の夫日本・妻中国による婚姻件数が11926組であり、18大都市で4388組となり、全体の36.8%を占めている(2008年厚生労働省 人口動態統計)。20年前の1997年でも夫日本・妻中国による婚姻件数は6630組であり、13大都市で2593組となり、全体の39.1%を占めていた(1998年厚生労働省 人口動態統計)。にもかかわらず、都市部在住の結婚移住者に関する考察は行われなかった。結婚移住女性の全体像を把握するために都市部在住の人に対する考察も不可欠ではないだろうか。

2 新国際分業が行われる時代の産物である。経済のグローバル化により、製品産業の生産拠点が急速に中国大陸へと移転した結果、大規模な出稼ぎ女工の雇用形式が生まれた。

3 郝(2010)が用いる社会関係資本の概念は調査地域と日本との関わりを意味しており、個々人がもつ人間関係資本、社交資本などという意味とは異なっている点に注意すべきである。

また、中澤（1999）は1996年までに「嫁入り」した中国人女性の動機を経済的要因と「夫の魅力に惹かれた」、賽（2011）は2000年代に結婚移住する農村出身で恵まれない経済状況にある女性の国際結婚の主要因を経済的要因とジェンダー要因にまとめ、郝（2010）は2000年代の業者婚の形成要因について、地域特性と個人要因との相互作用で業者婚が成立すると述べた。つまり、それぞれ特定の時期における日中国際結婚の動機を把握した。しかし、改革開放以来、中国社会は大きな変化が生じている。社会制度の変革や経済改革により、人々の生活や意識は大きな影響を受け、国際結婚に対する認識も次第に変化してきた。そのような時代の変化による結婚動機の変化を考察する視点は、今までの研究では欠けている。

3, 研究の視点と方法

以上、先行研究を踏まえ、本研究では、日本の都市部に嫁いだ中国人結婚移住女性の結婚の動機について、時代ごとに動機の特徴を把握した上で、時代の推移に伴い動機がどのように変化してきたかを考察し、その変化をもたらした原因を探求する。

そのために、2016年6月から、2018年1月までの間、北海道、山形、埼玉、東京、大阪、神奈川などの都市部で中国人結婚移住者を対象に質問紙調査を行った。調査票は、中国語で作られ、調査内容は、日本の都市部に嫁いだ中国人女性の結婚に至る経緯、生活実態、子育て戦略とした。調査方法は、日本語教室に電話で連絡を取り、調査票の配布を依頼した。スノーボールサンプリング法も併用し、個別に調査票を郵送したケースもある。調査票は187部配布し、有効回収数は120部、有効回収率が64.2%であった。

アンケート調査の協力者の中から15人（インタビュー調査の依頼に応じてくれた人）に聞き取り調査を実施した。アンケートで把握できなかった内容を補充し、習慣・文化の違いによる葛藤、国際結婚生活の悩み等を尋ねた。

4, 調査結果

(1) 日本人男性と中国人女性による国際結婚の段階区分

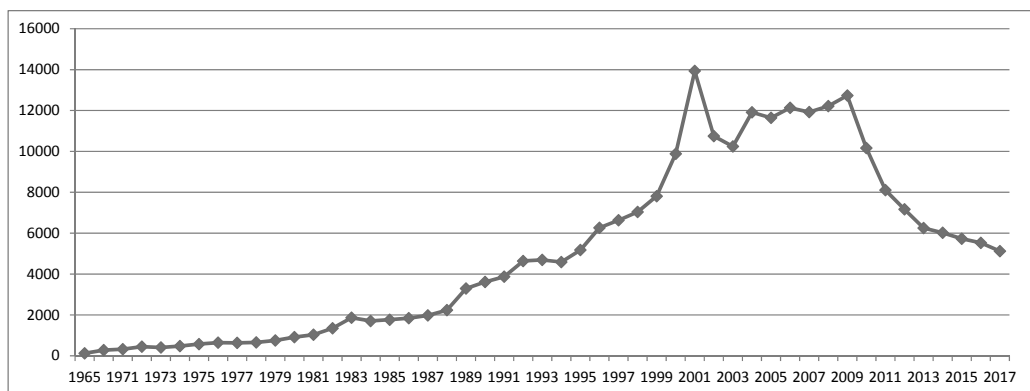


図1 日本人男性と中国人女性による国際結婚件数の推移

日本における国際結婚の段階区分について、藤井（2018）の研究では、1980年代から1990年代末までを発生期、2000年以降から2010年までを増加期、2010年以降を転換期とする（藤井 2018）。日中国際結婚の推移も図1のように、全体的な傾向とほぼ合致している。日中国際結婚は、1999年までに徐々に増え、本研究ではこの時期を発生期とする。2000年から2009年までは急激な増加と減少を経て、また緩やかに増加する傾向にあり、この時期を変化期とする。2010年以降は減少傾向を示しており、減少期とする。このような日中国際結婚の段階区分に基づき、それぞれの時期に結婚した中国人結婚移住女性の結婚の動機を分析してみる。

(2) 結婚時期別の動機—アンケート調査の結果から

①発生期（1999年まで）に結婚した女性の動機

発生期に結婚した人の動機について、表1にまとめた。この時期に結婚した19人のうち、7人（36.8%）は夫に対する愛情が結婚の動機となっている。6人（31.6%）は夫に対する愛情に日本に対する興味や、生活環境・社会福祉に対する安心感、適齢期の影響なども加わり、国際結婚に至った。離婚の経験が動機とする人は1人（5.3%）であり、離婚の経験と日本に対する興味で国際結婚の道を選んだ人は1人（5.3%）である。貧困、適齢期、日本に対する興味、仲介の勧誘、生活環境・社会福祉に対する安心感等の要素が連動して、国際結婚に繋がった人は2人（10.6%）である。興味本位で国際結婚をしたのは1人（5.3%）である。適齢期を過ぎたため、国際結婚を選んだ人は1人（5.3%）である。

②変化期（2000—2009年）に結婚した女性の動機

変化期に結婚した49人の動機については表2にまとめた。夫に対する愛情を動機として挙げる人は9人（18.4%）いる。日本に対する興味、生活環境・社会福祉に対する安心感、適齢期の影響、夫に対する愛情を組み合わせる人は6人（12.2%）である。離婚の経験と愛情で結婚した人は3人（6.1%）である。貧困と愛情を動機とする人は1人（2.0%）である。離婚の経験を動機とする人は3人（6.1%）であり、離婚の経験と日本に対する興味、生活環境・社会福祉に対する安心感などの要素が複合する人は2人（4.1%）いる。貧困を動機とする人は2人（4.1%）であり、貧困と離婚で国際結婚を選んだ人は4人（8.2%）である。貧困と生活環境に対する安心感、適齢期の影響が連動し結婚に至った人は2人（4.1%）いる。興味を結婚の理由として挙げる人は7人（14.3%）いる。適齢期を過ぎたため、国際結婚を選んだ人は6人（12.2%）である。生活環境に対する安心感から結婚する人は2人（4.1%）である。仲介業者の勧誘で結婚したのは1人（2.0%）であり、仲介業者の勧誘と日本に対する興味を動機とする人は1人（2.0%）である。

③減少期（2010年以降）に結婚した女性の動機

減少期に結婚した52人の状況については、表3のように、夫に対する愛情だけが動機である人は18人（34.6%）である。生活環境・社会福祉に対する安心感、日本に対する興味、適齢期などが夫に対する愛情と複合し、結婚に至った人は8人（15.4%）である。離婚の経験を動機とする人は1人（1.9%）、離婚の経験と日本に対する興味、生活環境・社会福祉に対する安心感などを組み合わせる人は5人（9.6%）である。貧困と仲介の勧誘を理由とする人は1人（1.9%）である。興味本位で国際結婚の道を選んだ人は3人（5.7%）である。適齢期を過ぎたため、国際結婚の道に踏み出した人は8人（15.4%）である。中国では男性は年下の女性を結婚相手にするため、結婚相手探しは難しくなるとした人は1人（1.9%）である。日本に対する興味、生活環境・社会福祉に対する安心感などから動機が構成される人は7人（13.5%）である。

④全体的特徴

以上のような傾向を表4でまとめた。ここから変化期は発生期、減少期と大きく異なる特徴があることがわかる。すなわち、変化期に結婚した人は愛情だけを動機とする人や愛情と興味、生活環境・社会福祉、適齢期と組み合わせる人は少ない。これに対し、愛情と離婚、愛情と貧困で国際結婚を選んだ4人はすべてこの時期に分布している。それに加え、変化期に結婚した人は、離婚と興味、生活環境・社会福祉などの組み合わせが動機となる人は少ない。しかし、離婚だけを動機とする人が多く、更に、離婚と貧困を理由に国際結婚をした4人はこの時期に集中する。変化期に結婚した人は、貧困と生活環境・社会福祉、興味、仲介の勧誘、適齢期が複合し、結婚に至った者は比較的少ない。つまり、変化期において、愛情と離婚や貧困の組み合わせ、あるいは離婚、離婚と貧困の組み合わせ、貧困が動機となる人が他の時期と比べ、比較的多い傾向がうかがえた。言い換えれば、この時期において、離婚の経験、貧困の事情が直接的に、あるいは夫に対する愛情を通して間接的に結婚の動機に影響している。

表1

| 動機 結婚時期 | 愛情 | 興味 愛情 | 生活環境 社会福祉 愛情 | 生活環境 社会福祉 興味 愛情 | 適齢期 愛情 | 適齢期 生活環境 社会福祉 愛情 | 離婚 | 離婚 興味 | 貧困 生活環境 | 貧困 適齢期 興味 仲介の勧誘 社会福祉 | 興味 | 適齢期 | 合計 |
|------------|-------------|-------------|--------------------|--------------------------|------------|---------------------------|------------|------------|------------|----------------------------------|------------|------------|---------------|
| 発生期 | 36.8% 7人 | 10.6% 2人 | 5.3% 1人 | 5.3% 1人 | 5.3% 1人 | 5.3% 1人 | 5.3% 1人 | 5.3% 1人 | 5.3% 1人 | 5.3% 1人 | 5.3% 1人 | 5.3% 1人 | 100.0% 19人 |

表2

| 動機 結婚時期 | 愛情 | 興味 愛情 | 社会福祉 興味 愛情 | 適齢期 生活環境 愛情 | 適齢期 生活環境 社会福祉 興味 愛情 | 離婚 | 離婚 愛情 | 離婚 興味 | 離婚 興味 生活環境 社会福祉 | 貧困 | 貧困 生活環境 | 合計 |
|------------|-------------|------------------|--------------------------------|-------------------|---------------------------------|-------------|-------------|------------|--------------------------|-------------|---------------|----|
| 変化期 | 18.4% 9人 | 4.1% 2人 | 2.0% 1人 | 2.0% 1人 | 4.1% 2人 | 6.1% 3人 | 6.1% 3人 | 2.0% 1人 | 2.0% 1人 | 4.1% 2人 | 2.0% 1人 | |
| | 貧困 離婚 | 貧困 離婚 生活環境 | 貧困 離婚 興味 生活環境 社会福祉 | 貧困 適齢期 | 貧困 愛情 | 興味 | 適齢期 | 生活環境 | 仲介の勧誘 | 仲介の勧誘 興味 | 合計 | |
| | 4.1% 2人 | 2.0% 1人 | 2.0% 1人 | 2.0% 1人 | 2.0% 1人 | 14.3% 7人 | 12.2% 6人 | 4.1% 2人 | 2.0% 1人 | 2.0% 1人 | 100.0% 49人 | |

表3

| 動機 結婚時期 | 愛情 | 興味 愛情 | 生活環境 社会福祉 愛情 | 生活環境 社会福祉 興味 愛情 | 適齢期 愛情 | 適齢期 生活環境 社会福祉 興味 愛情 | 離婚 | 離婚 興味 生活環境 社会福祉 | 貧困 仲介の 勧誘 | 興味 | 適齢期 | 男性は 年下の 女性と の結婚 を望む | 生活環境 社会福祉 | 興味 生活環境 社会福祉 | 合計 |
|------------|--------------|------------|--------------------|--------------------------|------------|---------------------------------|------------|--------------------------|-----------------|------------|-------------|---------------------------------|--------------|--------------------|---------------|
| 減少期 | 34.6% 18人 | 1.9% 1人 | 3.8% 2人 | 3.8% 2人 | 1.9% 1人 | 3.8% 2人 | 1.9% 1人 | 9.6% 5人 | 1.9% 1人 | 5.7% 3人 | 15.4% 8人 | 1.9% 1人 | 7.6% 4人 | 5.7% 3人 | 100.0% 52人 |

表4 結婚時期別に動機の変化

| 結婚時期 | 動機 | | 愛情 離婚 | 愛情 貧困 | 離婚 | 離婚 興味 生活環境・社会福祉 | 貧困 生活環境・社会福祉 興味 仲介の勧誘 適齢期 | 貧困 離婚 | 貧困 |
|------|-------|------------------------------|----------|----------|------|-----------------------|---------------------------------------|----------|------|
| | 愛情 | 愛情 興味 生活環境・社会福祉 適齢期 | | | | | | | |
| 発生期 | 36.8% | 31.6% | 0.0% | 0.0% | 5.3% | 5.3% | 10.6% | 0.0% | 0.0% |
| | 7人 | 6人 | 0 | 0 | 1人 | 1人 | 2人 | 0 | 0 |
| 変化期 | 18.4% | 12.2% | 6.1% | 2.0% | 6.1% | 4.1% | 4.1% | 8.2% | 4.1% |
| | 9人 | 6人 | 3人 | 1人 | 3人 | 2人 | 2人 | 4人 | 2人 |
| 減少期 | 34.6% | 15.4% | 0.0% | 0.0% | 1.9% | 9.6% | 1.9% | 0.0% | 0.0% |
| | 18人 | 8人 | 0 | 0 | 1人 | 5人 | 1人 | 0 | 0 |

表5 調査対象者の属性

| 段階 | ID | 年齢 | 結婚時期 | 出身地域 | 出身階層 | 結婚の動機 | 結婚の契機 | 婚姻状態 |
|-----|----|----|------|------|------|------------------------|-------|------|
| 発生期 | J | 51 | 1994 | 都市 | 裕福層 | 離婚の経験 | 知人紹介 | 再婚 |
| | D | 48 | 1999 | 都市 | 中間層 | 愛情 | 出会い婚 | 初婚 |
| 変化期 | A | 42 | 2005 | 農村 | 貧困層 | 貧困, 離婚の経験, 生活環境に対する安心感 | 知人紹介 | 再婚 |
| | B | 42 | 2009 | 都市 | 中間層 | 離婚の経験, 愛情 | 出会い婚 | 再婚 |
| | C | 45 | 2008 | 都市 | 中間層 | 貧困, 離婚の経験 | 仲介業者 | 再婚 |
| 減少期 | E | 35 | 2015 | 都市 | 中間層 | 離婚の経験, 愛情 | 知人紹介 | 再婚 |
| | F | 36 | 2011 | 都市 | 裕福層 | 適齢期の影響, 愛情 | 出会い婚 | 初婚 |
| | G | 27 | 2018 | 農村 | 貧困層 | 適齢期, 興味, 生活環境・社会福祉, 愛情 | 知人紹介 | 初婚 |
| | H | 32 | 2010 | 農村 | 中間層 | 愛情 | 出会い婚 | 初婚 |
| | I | 43 | 2015 | 農村 | 中間層 | 離婚の経験, 生活環境 | 知人紹介 | 再婚 |
| | K | 31 | 2011 | 都市 | 中間層 | 愛情 | 出会い婚 | 初婚 |
| | L | 35 | 2011 | 農村 | 中間層 | 愛情 | 出会い婚 | 初婚 |
| | M | 38 | 2011 | 都市 | 中間層 | 適齢期の影響 | 知人紹介 | 初婚 |
| | N | 27 | 2018 | 農村 | 中間層 | 愛情 | 出会い婚 | 初婚 |
| | O | 33 | 2012 | 都市 | 中間層 | 愛情 | 知人紹介 | 初婚 |

(3) 変化期の特徴が生じる原因の分析

離婚や貧困がどのように直接的に、あるいは愛情を通して間接的に動機に影響するのか、なぜこの傾向が変化期に集中するのか、を探求するため、変化期における愛情、離婚の経験、貧困という3つの動機について、女性たちのライフヒストリーから、他の時期と比べながら、分析してみる。

表6 結婚時期と夫に愛情を持つことのクロス表

| | | 夫に愛情を持つ | | 合計 | |
|------|-----|---------|-------|-------|--------|
| | | 無し | 有り | | |
| 結婚時期 | 発生期 | 度数 | 10 | 9 | 19 |
| | | 構成比 | 52.6% | 47.4% | 100.0% |
| | 変化期 | 度数 | 32 | 17 | 49 |
| | | 構成比 | 65.3% | 34.7% | 100.0% |
| | 減少期 | 度数 | 21 | 31 | 52 |
| | | 構成比 | 40.4% | 59.6% | 100.0% |
| 合計 | | 度数 | 63 | 57 | 120 |
| | | 構成比 | 52.5% | 47.5% | 100.0% |

P<0.05

① 「夫に愛情を持つ」ことについて

まず、「夫に愛情を持つ」ことに関して、アンケート調査では表6のような結果を得た。発生期に結婚した人の47.4%はこの動機を持っている。変化期に結婚した人の場合、34.7%は夫に愛情を持っている。減少期に結婚した人は59.6%が夫に愛情を持つ。つまり、夫に対する愛情は変化期には動機としての値が低い。

インタビュー調査でも同じ傾向が見出され、発生期に嫁いだ2人の中、1人（50%）が夫に愛情を持ち、減少期に嫁いだ10人の中8人（80%）が愛情で結婚した。これに対し、変化期に嫁いだ者は3人の中、1人（33.3%）だけが夫に愛情を持っていた。

更に、愛情の内実について、インタビュー調査のうち、愛情を動機とする人のライフヒストリーを結婚時期別に分析する。

a発生期に日本人男性と結婚したD

1999年に結婚したDは山東半島の東北沿岸部に位置するd市のある中間層の家族で生まれ、1994年本人が23歳の時、日本へ留学にやってきた。しかし、当時の家庭状況は授業料や生活費を全部出すのが無理だったため、自分で働きながら、留学生生活を維持していた。友達の紹介で、夫が運営する料理店でバイトをすることになった。そこで、夫の魅力を傍で感じていた。「一番、彼に惹かれたところは、誰にも頼らず、自力で理想の自分になるという心強さである」。このような夫に好感を持った。大学卒業後、Dには中国へ戻りたくない理由が2つあった。1つには、来日前に、中国で交際して別れた男性と会いたくないという気持ちがあった。もう1つの理由は、父は軍人で小さい頃から厳しく育てられてきた。父から再び束縛されたくなかった。当時は留学生の就職が非常に厳しい状況であった。中国と貿易上の関わりがない限り、留学生は雇えない仕組みだった。ビザ更新の問題もあり、1999年結婚を決めた。

b変化期に日本人男性と結婚したB

Bは中国遼寧省のb市の出身で、姉1人妹1人の3人姉妹である。父は工場で働き、母は専業主婦をやっていた中間階層の家庭で育った。大専⁴卒業後、国营企業に配属された。そこで4

4 専科ともいう。高等教育の一部で、大専卒は4年制の大学本科より期間が短い、日本の短期大学に相当する。

歳年下の元夫と出会い、恋愛結婚し、子どももできた。当時、会社は日本側と貿易関係を結び、Bは2005年に日本へ派遣されることになった。そこで、今の夫と出会った。生年月日が同じなので、会社の人達はいつも2人の誕生日祝いのパーティーを開いた。Bの来日数ヶ月後、元夫も日本へ派遣され、別の所で働き始めた。2人は引き続き離れ離れの生活を続けた。当時はまだ携帯電話やインターネットが利用できない時期で、給料も高くないため、日本にいる3年間で、2回しか会えなかった。こういう状況の中、元夫は6歳年下の女性と出会い、不倫関係に発展した。来日3年後、2008年に中国へ戻り、離婚届けを出した。娘の親権を取ったが、離婚後最初の半年は病気になり、当時7歳の娘の世話ができなくなり、「小飯卓」（主に子どもに食事を提供する場所であるが、親の需要に応じて、子どもの世話を見るサービスも提供できる）に一時的に預けた。体が回復した後、隣の町大連で、当時友達が経営する医療機器を取り扱う会社で働き始めた。最初は、b市でも支店を出して、Bは地元に戻って、管理する予定だったが、結局大連でもうまくいかず、実現できなかった。当時中国では伝統的な意識が根強く、離婚する人は珍しい存在として問題視されている状況もあり、Bは周りの人から異様な目線で見られたことにも傷ついた。家族は次の結婚相手探しに取り組んでいた。「叔母さんが私と同じく離婚経験を持ち、連れ子もいる男性を紹介した。子どももうちの子と同じ年齢だった。よく考えてみて、やっぱり諦めた。実際、周りには同じような再編家庭があり、自分の子が相手に平等に扱われないことで、婚姻関係が破綻する例があった。中国はやはり血の繋がりを重視する社会で、連れ子を自分の子と同等に扱うことが期待できない」。Bは中国で再婚することを断念した。その時の境遇を日本にいる今の夫が知った。「日本で働いている間に、私に好意を持つようになったと彼に告白された。それに、その当時の環境から私を救い出すため、結婚の話を持ち掛けた」。Bが一番気になる娘のことについても、安定してから、日本へ連れてくればいいとのことだった。Bは「この人の優しさに魅力を感じ、愛情を持つようになった」。

c 減少期に日本人男性と結婚したE

減少期に結婚した10人の中、8人が夫に愛情を持っている。その8人の中から、離婚の経験があるEの事例を取り上げる。

2015年に再婚したEは中国吉林省e市の出身で、一人っ子として生まれた。両親とも工場労働者で、幼い頃の家収入は中間階層に属していた。1回目の婚姻関係が失敗し、娘の親権を取り、1人で子育てをしていた。友達の紹介で、当時天津で働いている今の夫と出会った。何回か天津へ行ってデートしていた。2015年4月に、今の夫は蘇州へ転勤した。Eも仕事を辞めてついて行った。最初の2ヶ月は2人で生活した。2ヶ月後、2015年7月にEは娘を連れてきた。今の夫は娘に対し、自分の子のようにかわいがった。2015年10月に中国で結婚届を出した。夫に対する愛情の内実について「彼は日本の大手建築業者に勤めていたが、そもそも日本でも収入の高い階層に属していて、中国に派遣されたら、収入が元より高くなり、買い物する時、欲しいものは全部買ってくれた。経済的余裕があるだけでなく、精神的にも娘を受け入れてくれることに心の広さを感じ、魅力がある」。

他の7人の夫に対する愛情の内実について、人生経験が豊富なこと、亭主関白ではなく、一方的に妻に合わせることを、要求を全部満たし、妻を大事にすること、計画性があること、格好いいことなどが挙げられた。

d 変化期に結婚した女性の場合、離婚の経験がどのように愛情を通して、間接的に動機に影響するのかの分析

以上、15人のインタビュー調査対象者のうち、10人が「夫に愛情を持つ」を選んだ。その10人の「愛情の内実」について、1999年に結婚したDは夫の自力で起業を成功させる心強さと実力に魅力を感じた。2009年結婚したBは再婚者である自分と連れ子を受け入れる優しさに魅力を感じた。減少期に結婚した女性は愛情の中身が多様になっている。つまり、変化期に嫁いだ人は、連れ子の問題と関わって初めて愛情が生じ、国際結婚に至った。

表7 結婚時期と離婚の経験があり、中国では再婚が困難になったのクロス表

| | | | 離婚の経験があり、中国では再婚が困難になった | | 合計 |
|------|-----|-----|------------------------|-------|--------|
| | | | 無し | 有り | |
| 結婚時期 | 発生期 | 実数 | 17 | 2 | 19 |
| | | 構成比 | 89.5% | 10.5% | 100.0% |
| | 変化期 | 実数 | 39 | 10 | 49 |
| | | 構成比 | 79.6% | 20.4% | 100.0% |
| | 減少期 | 実数 | 44 | 8 | 52 |
| | | 構成比 | 84.6% | 15.4% | 100.0% |
| 合計 | | 実数 | 100 | 20 | 120 |
| | | 構成比 | 83.3% | 16.7% | 100.0% |

②「離婚の経験」について

離婚の経験があり、中国では再婚が困難になったことの時代による変化について、アンケート調査の結果を表7で示した。発生期に結婚した人のうち、10.5%、変化期では20.4%、減少期では15.4%を占めている。変化期に結婚した人はこの動機を持つ確率が高いことがわかった。

同じ傾向はインタビュー調査でも把握できた。インタビュー調査では発生期に結婚した2人（DとJ）のうち、1人（J）（50.0%）はこの動機を持ち、変化期に結婚した3人（A、B、C）はすべてこの動機を持っている。減少期に結婚した10人のうち、2人（EとI）（20.0%）がこの動機を持っている。

更に、離婚の経験を動機とする6人の状況を見てみよう。

a 発生期に日本人と再婚したJ

1994年に日本人と再婚したJは裕福な家庭で生まれて、1970年代末から、中国では「万元戸⁵」が出て来て、その時期Jの家庭はすでに「万元戸」の行列に入った。両親の過保護の中で、外の世界に対し、何も知らないまま、成長してきた。大専の時、クラスメートの男性と付き合うようになり、当時彼の家庭状況はJとはかけ離れていたが、Jは親の反対を押し切って結婚した。結局、出身階層が違ったため、考え方にギャップが生じ、1992年娘がまだ幼稚園の時、婚姻関係は破綻した。その後、娘と2人の生活を始めた。住宅を購入し、1人で娘を養うことに経済の面では何の問題もなかったが、一番気になるのが離婚に対する周囲の反応であった。「当時中国人は噂話が大好きで、誰かに何かあった時、周りの人達は陰でその人の話をする風

5 貯金あるいは年収が1万元（16万円相当）を超えているような高収入の家庭を指す。

潮があった。特に、元夫とは同じ職場で働いているから、離婚したことはすぐ同僚たちにはばれた。皆が私たちのことを陰であれこれ噂していることは仲良くしている同僚から知らされた。その時期、職場の人と向き合いたくなくなり、職場では居場所を失ったように感じ、仕事を辞めざるを得なかった。職場だけではなく、近所の人も私の離婚に興味津々で、よく親に「娘さんは離婚したの、そんなに若いのになぜなの」と声をかけてきた人がいる。両親も対応に苦しんだ。親にとっては、裕福な家庭環境を作り上げ、すべての愛情を注いで育てた娘が婚姻で失敗することはかなりのショックだった。親は夫との結婚に反対したが、Jは意地を張り、親の意思に逆らって結婚に至った。しかし、親はJを責めることなく、回りの噂から解放させるため、再婚の相手探しに取り組んでいた。Jは1回目の結婚で失敗し、2度目も同じことを繰り返せば、人生が終わりだと思い、親の見合いの話には応じなかった。その時期は、離婚に対する挫折感を味わいながら、周りの噂に耐えて、親に対する罪悪感もあり、本当に辛い時期だった。その時、日本で留学した経験を持つ友達が、日本人との結婚を提案した。日本では失敗しても誰もJのことを知らないから、とりあえず、中国から逃げ出そうという考えで友達の提案を受け入れた。友達の斡旋で、今の夫が中国へ来て、初対面で、彼はJに好感を持つようになった。Jは彼に対しそれほど好感を持たなかったが、彼はJとJの娘両方を受け入れてくれることから、結婚を決めた。

裕福層出身のJは周りの人と比べ、常に優越感を持っていたが、婚姻の失敗は彼女の自尊心を傷つけ、周囲の人に顔向けできないほどだった。また、職場の同僚や近所の人たちがJの離婚を話題にすることもJにダメージを与えた。このような環境に居づらくなったJは国際結婚の道を選んだ。

b 変化期に日本人と再婚したA, B, C

2005年に再婚したAは、初婚（2001）の2年後、まだ妊娠中だったが、夫の浮気を発見し、離婚を決めた。「離婚した後は、家に閉じ込もっている状態が1ヵ月間続いた。実際、他人に離婚のこととか、夫の浮気とかいろいろ聞かれたりするのが嫌だった。中国では「人言可畏」という言い方があり、人のうわさが本当に恐ろしいことだ。人の目に対する警戒感の中で、夫に裏切られた傷を癒すことの辛さを伝えられる相手がいなかった。その時から、こんな経験は生涯1回だけで十分、2度と同じ目に遭わないよう、中国での再婚を諦めた」。

2009年に再婚したBは、初婚は夫の浮気で離婚（2008）し、「その時期の中国社会は離婚者を受容しやすい環境とは言えない。婚姻失敗者は問題があるものとみられ、家族にも影響が及んだ。〇〇家の娘が離婚したよ、というように噂が流されて、あれは家族にとって面子が立たないことであり、家族は急いで相手探しに取り組んでいた」。ようやくBの状況と似ている男性を見つけたが、Bは周囲にある連れ子同士の家族の困難な経験と中国人は血のつながりを重視する現実を強く受け止めて、交際を断った。

2008年に再婚したCは、初婚は夫のDVの問題で、2003年破綻し、1歳の息子を持って家から出た。最初は実家に戻った。「私が実家に戻ることもすぐ隣の人に知られちゃった。最初はただの帰省だと伝えたが、長い間、ずっと実家にいることに、違和感を覚えるに違いない。周りの人達の間で「〇〇家の娘がもしかしたら、離婚したのかもしれない、子どもがかわいそうね」という噂が流れてきた。私自身は離婚を決める前に、噂に耐えることを覚悟していたが、息子を噂の影響から離れさせるため、息子を持って、実家から出た」。その後、何年間かの母子2人での生活に疲れていたCは同じく連れ子を持っている男性と交際するように

なった。「交際する間、4人家族の関係作りに葛藤が生じ、両方とも自分の子に傾きがちになり、子ども間のトラブルが大人間のトラブルに発展しちゃった。結局、別れた。この経験を通し、中国人との再婚を断念した」。

A, B, Cは離婚することで、周りから噂されることを経験した。Aは他人の目を気にすることの辛さを痛感し、中国での再婚を諦めた。B, Cは連れ子がいて、周りの非難を浴びても、子どものために、立ち上がり、母子2人のこれからの人生を考えなければならない立場となった。Bは娘を守るため、家族が持ちかける縁談の話に応じなかった。Cは新しい家族を作り上げても、子ども間の関係作りが夫婦関係に影響を及ぼし、家族関係がうまく行かなかった。

c 減少期に日本人と再婚したE, I

2014年に離婚し、2015年に日本人と再婚したEは、「離婚することで、周りから非難されることや偏見を持たれることは一切なく、この時代の離婚はごく普通で、もはや日常茶飯のようなものとしてみなされている。だから、離婚により、世間から影響を受けることなく、それより、再婚することにストレスを感じ、慎重に考えなければならない」と述べ、中国での再婚に対し、彼女なりの考えを持っていた。「そもそも2人の関係作りであるはずの夫婦関係は連れ子がいる場合、連れ子との関係作りも夫婦関係に大きな影響を与えている。中国では連れ子との関係作りは非常に難しいため、夫婦関係の維持も次第に困難になっている。そもそも、自分は気性の荒いタイプで、娘を自分の命よりも重要視しているから、夫婦関係の中でも娘を最優先に考えるようになってしまう。そうすると、必ずいろんなトラブルが発生しがちになるに違いない。それも、また娘の成長には絶対よくないことだと認識し、中国人との再婚を諦めた」。

2015年に再婚したIは黒竜江省i市の農村部の出身で、兄弟3人を持つ6人家族である。家庭状況は村の中で中間層に属している。22歳の時（1996年）、本人は結婚する気は全くなかったのに、農村部では適齢期だということで、親が見合いを手配して、結婚に至った。実際2人の性格が違いすぎて、トラブルが絶えず、2008年に離婚届けを出した。夫は長男の親権を取り、Iは次男の親権を取った。「農村部では都市とは違い、開放度が高く、家族単位で情報が共有される特徴がある。〇〇家に何かあったら、村全体に知らされた」。Iの離婚も個人のことではなく、家族のこととして、受け止められていた。農村では男尊女卑の観念が強く、離婚に対し、女性の方に偏見を持ちやすく、特に、Iの場合、子どもが2人いるから、「何で子どものために、夫に合わせないの、もっと我慢すればいい」という非難の声を浴びる中で、家族がストレスを感じ、慌てて再婚相手探しに取り組んでいた。家族が連れ子を受け入れる人を見つけ、付き合い始めた。しかし、1回の失敗を経験したため、性格の相性に対する拘りが強くなり、相手は思う通りの人にならないこともあり、別れた。学歴が低く、就職もできず、離婚して子どものいるIはもう中国には居場所がないと思い、2010年、子どもを連れて日本へ渡った。日本語が話せないまま、小学校に入った息子は最初に周りの子どもからいじめられた。息子は小さい頃に親が離婚したため、父親の愛情不足の中で成長し、日本に来て、外国人であることや、日本語が分からないことで、同級生に仲間はずれされた。Iはこのような辛い経験が今後の人生に悪影響を及ぼすことを懸念し、それを解決するために健全な家庭を作り、溢れた愛情の中で育てるしかないと考えた。また、1人で子育てをするのは大変なので、頼りになる人を探し始めた。「友達の紹介で今の夫と知り合った。彼は私の状況をすべて分かった上で、私と子どもを受け入れてくれた本当に人柄がいい人である。年齢差が大きい、心

が広く、安心感を与えた。子どもも彼を再婚相手として認めたため、2015年結婚を決めた」。

Eは離婚したことで、周りに非難されることはなかったが、連れ子がいたため、再婚することを考える際、連れ子との関係作りが難しい点を慎重に考えた。その結果、中国人との再婚を断念した。Iは2008年に離婚した後、再婚ができなかったため、中国では居場所がないと判断し、息子を持って日本へ渡った。息子が小学校でいじめられたことをきっかけに日本人との結婚を考え始めた。

d 離婚の経験がどのように動機に影響するのか、なぜ離婚の経験が動機となる人は変化期に集中するのかについての分析

以上、発生期に再婚したJは周りから離婚者に対する偏見を気にしすぎた結果、中国では居づらくなり、国際結婚の道に踏み出した。変化期に再婚したAは離婚後、世間の噂を恐れたため、家に閉じ込める経験があった。この経験は国際結婚のきっかけとなっている。B、Cは婚姻の失敗で、世間から非難されることにとどまらず、連れ子がいることで、再婚の困難さについて他人の経験や自身の経験から分かるようになった。その困難さが彼女たちを国際結婚の道へと導いた。2015年に再婚したEは、離婚による世間からの影響は受けなかったが、再婚を考える際に、連れ子がいることが中国人男性ではなく、日本人男性を選ぶというように影響した。2015年に再婚したIは1回目の婚姻が失敗した後、再婚も実現できず、中国で居場所がなくなり、息子連れ、生活の拠点を日本へ移した。日本語が話せない息子が小学校でいじめられたことが彼女に強く影響し、日本人と再婚することに繋がった。

このように、離婚を経験した女性たちが「中国で再婚が困難になった」ことの内実が明らかになった。発生期では世間の離婚に対する偏見が中国での再婚の道を塞いだ。変化期では世間の離婚に対する偏見と再編家庭の関係作りの難しさが国際結婚のきっかけとなった。減少期は世間から影響されずに、再編家庭の関係作りの困難さが相変わらず持続している。つまり、離婚の経験から再婚の困難さに直面することが結婚の動機と繋がった。それでは、なぜ、再婚の困難さで国際結婚を選択した人は変化期に集中するのか、を離婚件数の推移と社会の変遷と付き合わせながら分析する。

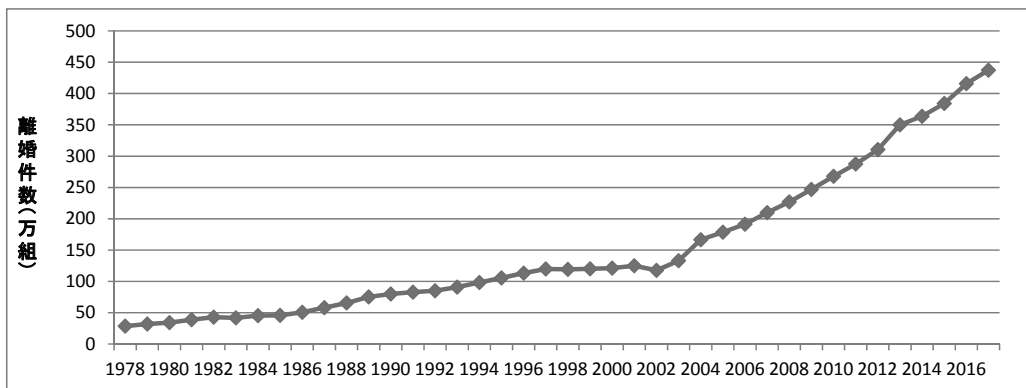


図2 離婚件数の推移

中国での離婚件数の推移は図2で示すように、1978年以来増加してきている。特に2002年から増え方が大きくなっている。離婚の増加は改革開放という時代背景の下、転換期を迎えた中国社会の変化から生まれたものである。しかし、離婚が急激に増加する最初の段階にお

いて、離婚に対する世間の意識の変革が離婚の増加に遅れていて、世間はまだ家庭の安定を重視し、離婚は顔向けできないことだと意識された。離婚者に対しても「一般者は離婚しない、離婚者は変わった者ばかり」というように、偏見を持っている。不幸な婚姻から脱出した人は批判の矢面に立たされた（張 2008）。特に、男尊女卑が根強い中国では、離婚した女性は男性より弱い立場に立っていて、女性のほうが離婚によるストレスが大きい。JとAは世間の反応に左右され、国際結婚の道に踏み出した。

一方、市場経済の急速な発展によって、自主性、開放性、平等性が人々の心に染み込んでいった。そして、個々人の利益や思いを重要視する時代への転換が生じた。それと同時に、世間の離婚に対する認識は、「離婚は個人のプライベートであり、他人は干渉すべきことではない」という認識に変化してきた。その結果、個人が婚姻関係の主体となり、他者の影響を受けずに、自分の意志で離婚を決めるようになった（張 2008）。

そのため、減少期には、世間の見方に影響されて、ストレスを抱えることが減り、国際結婚の道を選ぶ女性は少なくなった。つまり、中国の人々の離婚に対する意識が変わり、離婚した女性も中国社会で受け入れられるようになってきた。

更に、女性は離婚だけではなく、再婚の際も男性より不利な立場に置かれている。中国では男性の再婚率は女性の再婚率を大きく上回る現実がある。高穎・張秀蘭（2012）の研究によると、北京では男性の再婚率は女性の2.4倍となることが指摘された。特に、連れ子がいる女性の場合、状況が厳しくなり、再婚が実現できても、連れ子がいると、家族関係の維持も複雑な問題として受け止めている。周・李（2002）は「再婚市場」の中で男性の再婚率が女性のそれを大きく上回る理由として、男性は経済力を持つため、容易に自分より若い相手を見つけられることを挙げた。曾・王（1995）の研究は女性の再婚率に強く影響する要因として、前の夫との間に子どもがいるかどうかを取り上げ、前の夫との間に子どもがいない女性が子どもを持つ女性より再婚率が高いことを明らかにした。李（2010）は再婚夫婦の関係作りに影響する因子に関し、回帰分析をした結果、連れ子との関係作りは夫婦関係と統計的に有意であることを明らかにした。再婚家庭のうち、連れ子と仲良くしている場合、夫婦関係も円満になり、逆に、連れ子と仲良くしていないことは夫婦関係にも影響を及ぼす（李 2010）。

今回の調査では、Bは家族が手配した再婚相手に対し、周りにある再婚家庭の経験から、「血濃于水」⁶という固定観念の影響で、連れ子との関係作りが難しいことが分かり、交際を断った。Cは再編家庭の生活を実際経験してみたところ、良好な家族関係を築くことができず、別れることになった結果、中国での再婚を諦めた。

以上、2000年代の時期、世の中はまだ「家本位」の観念が崩されておらず、離婚に対し、否定的に評価する傾向が残されていた。また、昔から「男尊女卑」「血濃于水」の文化が根強い中国社会は、現在でも、その文化が人々の意識に影響しているため、女性のほうが離婚からのダメージが大きい、特に連れ子がいる場合、更なるストレスが加わった。2000年代は離婚が急激に増加すること、世間は離婚に対する偏見が崩されていないこと、再婚が難しいことという三つの要素が重なった結果、この時期に離婚した女性は国際結婚の道を選んだ人が多いということになった。

6 血の繋がっている親子の血液は水の中で融合することから、血縁が切り離さないことを意味する。

表8 結婚時期と 貧困な家庭状況から脱出して、裕福な生活に憧れた のクロス表

| | | | 貧困な家庭状況から脱出して、裕福な生活に憧れた | | 合計 |
|------|-----|-----|-------------------------|-------|--------|
| | | | 無し | 有り | |
| 結婚時期 | 発生期 | 実数 | 18 | 1 | 19 |
| | | 構成比 | 94.7% | 5.3% | 100.0% |
| | 変化期 | 実数 | 39 | 10 | 49 |
| | | 構成比 | 79.6% | 20.4% | 100.0% |
| | 減少期 | 実数 | 51 | 1 | 52 |
| | | 構成比 | 98.1% | 1.9% | 100.0% |
| 合計 | | 実数 | 108 | 12 | 120 |
| | | 構成比 | 90.0% | 10.0% | 100.0% |

1%水準で有意

③ 「貧困」について

最後に、結婚時期と貧困との関連性を考察してみる。表8で示すように、発生期に結婚した人の5.3%がこの動機を持っている。変化期に結婚した人の2割が貧困状態にある。減少期に結婚した人のうち、1.9%しかこの動機を持っていない。つまり、変化期に結婚した人がこの動機を持ちやすい。インタビュー調査では15人の中、2人が貧困を理由に国際結婚を選んだ。2人ともこの時期に嫁いできた。この2人のライフヒストリーを見てみよう。

a 変化期に日本人と結婚したA

Aは遼寧省東南部の農村で生まれ、姉2人、兄1人の6人家族で、家庭状況は貧困のため、中学までしか進学できなかった。1回目の婚姻は夫の浮気で破綻した。子どもの親権を取れなかったAは瀋陽でバイトをしながら、1人暮らしを始めた。就職の際「販売系の仕事しか雇ってくれなかった。しかも、バイトとして働き、いつ首になるのも不思議ではないくらい不安定の状態である。給料も低いし、ギリギリの生活を維持していた。更に、その時期は「コネ」と「経済力」が重視される時代だったが、私のような何も持っていない人は生き辛さを痛感した」。2004年、日本にいる姉の提案で、母の病気の治療をきっかけに、母に同行して日本へ来た。来日4ヵ月後、アルバイトを始めた。そもそも、親族訪問のビザでは就労できないが、姉の知り合いが運営する店でひそかに働いた。日本語はまだ話せないため、食器洗いの仕事しかできなかった。周りの日本人たちがみんな優しく対応してくれたことに感心した。これは当時の中国での状態とは正反対だった。Aにとって、中国では、お金や社会的地位がないと、生活するのは大変だった。日本で生活した方が楽であることに気づき、日本で生活することを考え始めた。更に、姉はAの苦勞を見て、日本人と結婚することを提案した。その時から、Aは日本人との結婚を考えた。

Aは離婚後、学歴が低いため、良い仕事を見つけることもできず、バイトとして働きながら1人暮らしを維持していた。その時期の中国社会は一定の社会的地位がないと、何をしてもうまくいかず、貧困層所属のAにとって、生活は容易ではなかった。その点、日本のほうが生活しやすかったので、生活の拠点を日本に移す考えが芽生えた。周りの親族に勧められ、日本人と結婚する道を選んだ。

b 変化期に日本人と結婚したC

Cは吉林省c市の出身で、中卒で、家庭状況は中間階層に属している。2002年、元夫と出会った3ヵ月後、電撃結婚をした。しかし、結婚後しばらくして、夫から暴力を振るわれるようになった。すでに妊娠していたため、子どもの出産まで我慢して、2003年に離婚届けを出した。息子の親権は取れたが、財産はもらえず、家から出た。1人で働きながら息子と2人の生活を維持していた。最初は実家に住んでいたが、途中で付き合う人ができて、その人の家で一緒に生活することになった。相手も離婚者で、連れ子がいた。子どもがいたので、家庭の中では、夫婦の関係作りというより、子どもの関係作り、大人と連れ子との関係作りが課題となり、子どもの間にトラブルが発生するたびに、両方とも自分の子をかばうようになり、結局、大人間のトラブルに発展した。その結果、別れることになった。

その後、また実家に戻った。しかし、母が亡くなり、父は再婚したので、実家には居づらくなり、息子を連れ、借家で母子2人で生活を始めた。片親家庭で育った息子は反抗心が強く、学校を退学し、社会に出て、バイトを始めた。当時Cは自営業を営んでおり、収入は不安定な状態が続き、ストレスが大きかった。更に、中国では息子の結婚に親が大金を用意する伝統があり、息子を持つCにとって、経済力がないことは悩みだった。友達を知り合いの運営する仲介業者の紹介で日本へ嫁ぐことを知った。それをきっかけにCも日本人と結婚することを考えるようになった。「周りに何人も日本人と結婚するケースがあった。日本は中国より経済が発達していて、彼女たちは豊かな生活を送っていた。息子のことを考えれば、国際結婚は唯一の解決案になるかもしれないという思いで、仲介業者に登録した」。

以上、Cは離婚した後、自力で母子2人の生計を維持せざるを得ない状況になり、ギリギリの生活を送っていた。その後、連れ子同士の再婚も経験したが、子どもの問題をめぐって、夫婦間において、認識と対応の仕方にギャップが存在することから、トラブルが発生し、夫婦関係が破綻する事態になった。Cはまた母子2人の生活に戻り、学歴が低いため、就職もうまく行かず、結局自営業をやるしかなかった。しかし、経営が不安定な状態で続く中、息子の成長に伴い、息子の結婚に大金を用意することも迫ってきて、打つ手がないCは、国際結婚の道に踏み出した。

c 貧困がどのように動機に影響するのか、なぜこの時期に貧困で国際結婚した人は多いのかについての分析

以上、AとCは2人とも中卒で、出身家庭もそれぞれ貧困層と中間層であり、離婚後、家族から経済的援助ももらえず、自分の力で、自分の生活、母子2人の生活を余儀なくされていた。学歴が低いことは就職の時に不利になり、Aはバイトとして働かざるを得なくなり、Cは息子がいて、時間通りの勤務は難しいため、自営業をやっていた。2人とも経済的に苦しい生活を送っていた。それにとどまらず、Aは社会生活の様々な面で、社会底辺に追いやられることの辛さを感じ、Cは息子がいるため、息子の結婚のために用意すべき大金がないことに困っていた。窮地にいるAとCは、Aの場合、日本での滞在経験を通し、日本での生活のしやすさがわかり、国際結婚へ進むことになった。Cは周りの人の国際結婚を通し、階層移動が実現できたことを知って、打開策として国際結婚を考え始めた。

A、Cのような人を生み出す当時の社会環境を考察してみよう。1978年に開かれた第11期3中全会以来、鄧小平を中心とする党中央が確立された。全党の活動の重点を経済建設へ移行することが決定され、「小康社会」を建設する思想を打ち出した。20世紀末に、「小康社会」が

基本達成された。しかし、基本達成は低いレベルであり、小康の水準に達していない人は数多く存在する。また、小康を達成する人口の分布状況について、都市と農村の間、東部西部の間、異なる収入層の間に発展水準の差が大きい。更に、小康の基本達成は物質生活の領域にとどまり、社会福祉、環境問題、精神生活の領域に行き渡っていない。こういう小康社会の現状に基づき、中国共産党第16回全国代表大会は21世初頭20年で「全面的小康社会」建設の目標を定めた。21世紀初頭10年は小康社会の基本達成から全面的達成に向かう転換期である(高 2014)。

以上のように、この時期は「小康社会」の基本達成から「全面的達成」へと転換する過程にあるため、生活水準が小康に達していない人は数多く存在する。こうした状況の下、AとCのように、日本での滞在経験や知り合いの人の滞在経験から、日本と中国の差を強く意識しながら、社会的地位の向上や現実的問題の改善のため、国際結婚の道に踏み出した人も少なくない。

5. まとめ

以上、改革開放以来、経済体制が社会主義市場経済へ移行することに伴い中国社会は大きな変化を迎え、離婚率が増加している。1999年までの発生期において、離婚は徐々に増え、それに応じ、国際結婚の数も緩やかに増加した。しかし、2000年代の変化期の特徴として、離婚の急激な増加が挙げられる。それに対し、世間の意識が離婚の増加に追いつかず、「家本位」の意識が根本的に変革できず、世間は家庭の安定を重要視する風潮であり、離婚に対しマイナスのイメージを持っていた。特に「男尊女卑」が根強い中国では離婚する際、女性は男性より弱い立場に立たされていた。更に、離婚だけではなく、再婚の際も男性より、女性の方は不利な立場に置かれていた。特に連れ子を持つ女性の場合、「血浓于水」の文化が伝わる中国では再婚家庭で、連れ子との関係作りが非常に難しく、それにより夫婦関係の維持も更に困難になっていた。こういう連れ子を持ち、中国では再婚が困難な女性にとって、日本人男性が連れ子を受け入れる優しさに魅力を感じ、結婚に至った構図が見出せた。また、国内の経済状況に関して、中国社会は小康社会の基本達成から全面的達成に向かう途中である。こういう転換期にある中で、小康達成の人口分布が不均衡な状態にあるため、生活水準が小康に達していない人が存在するのも不思議ではない。このような改革の恩恵を受けていない人のうち、離婚の経験を持つ人や、離婚で連れ子を持つ人も存在し、こういう女性たちが中国での再婚が困難なことも加わり、状況改善を図るため、変化期には国際結婚の道を選ばざるを得なかった。しかし、減少期になると、世間の離婚に対するイメージが変わり、国際結婚を選ばなくても中国社会で受け入れられるようになった。このように、時代の推移に伴い、中国人結婚移住女性の結婚の動機や傾向は変化している。

参考文献

- 宿谷京子, 1988, 『アジアからの花嫁—迎える側の論理』, 明石書店.
- 佐藤隆夫, 1989, 『農村(むら)と国際結婚』, 日本評論社.
- 葛慧芬, 1999, 「国際結婚に対する地域ケアシステム作りの重要性—中国人花嫁の事例から」, 『日中社会学研究』7: 日中社会学会.
- 加藤薫, 2004, 「中国人花嫁, 急増の謎と男たちの本音」, 『婦人公論』89(14): 132-5.
- 郝洪芳, 2010, 「日中国際結婚に関する考察—業者婚する中国女性の結婚動機を中心に」, 京都社会学年報 18: 67-81.
- 賽漢卓娜, 2011, 『国際移動時代の国際結婚—日本の農村に嫁いだ中国人女性』, 勁草書房.
- 中澤進之右, 1999, 『農山村の結婚難とアジア系外国人妻』, 農政調査委員会.
- 藤井勝・平井晶子編, 2018, 『外国人移住者と地方的世界』, 昭和堂.
- 張学見, 2008, 「改革开放以来我国离婚率嬗变研究—以社会历史背景变迁为视角—」首都师范大学硕士学位论文.
- 高颖・張秀兰, 2012, 「从再婚人口的性别差异看城市女性的再婚困境」, 南方人口 第27卷: 53-60.
- 周江・李駿, 2002, 「从离婚到再婚: 女性的视角」, 社会 2002, 11: 38-39.
- 曾毅・王德明, 1995, 「上海, 陕西, 河北三省市女性再婚研究」, 中国人口科学, 第5期: 1-10.
- 仲野誠, 1998, 「『外国人妻』と地域社会—山形県における『ムラの国際結婚』を事例として」, 『移民研究年報』, 92-109.
- 李倩, 2010, 「走进真实的再婚家庭—再婚家庭生活现状及婚姻满意度影响因素的实证研究—」, 上海社会科学院研究生毕业, 学位论文.
- 孟健軍, 2012, 「2020年全面的小康社会への展望」, 独立行政法人経済産業研究所.
- 高文韬, 2014, 「中国小康社会发展的历史进程研究」, 华东理工大学硕士学位论文.
- 厚生労働省, 2018a, 「夫妻の国籍別にみた年次別婚姻件数」, (2019年3月2日取得, <https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/81-1.html>).
- 厚生労働省, 2018b, 「夫妻の国籍別にみた都道府県(21大都市再掲)別婚姻件数」, (2019年3月2日取得, <https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/81-1.html>).
- 厚生労働省, 2008a, 「夫妻の国籍別にみた年次別婚姻件数」, (2019年3月2日取得, <https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/81-1.html>).
- 厚生労働省, 2008b, 「夫妻の国籍別にみた都道府県(18大都市再掲)別婚姻件数」, (2019年3月2日取得, <https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/81-1.html>).
- 厚生労働省, 1998a, 「夫妻の国籍別にみた年次別婚姻件数」, (2019年3月2日取得, <https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/81-1.html>).
- 厚生労働省, 1998b, 「夫妻の国籍別にみた都道府県(13大都市再掲)別婚姻件数」, (2019年3月2日取得, <https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/81-1.html>).

The Marriage Motive of Chinese Women Who had Married to Urban Areas in Japan. By Analyzing the Influence of the Changing Times

Yue Zhang

Key words

marriage motive, love, divorce experience, poverty

Abstract

This study aims at the marriage motive of Chinese women who had married to urban areas in Japan. By grasping the characteristics of the marriage motive in different times, the study analyzes the influence of the changing times on the marriage motive, and further analyzes the inherent causes. According to the survey results, in the first decade of the 21st century, divorce experience, poverty and other factors indirectly or directly affected the marriage motive through the love view. During this period, the change of public opinion failed to keep pace with the sharp increase in the number of divorces, which made people hold a negative attitude towards the divorced population. In addition, as the concept that men are superior to women was deeply rooted in people's mind, women were in a more disadvantageous position in divorce compared with men. Especially women who had children with their ex-husbands were confronted with the difficulty of remarriage. Japanese men could accept children between their wives and former husband unconditionally, which had a strong appeal to the Chinese women, and thus they choose transnational marriages instead. At the same time, China's society was transiting from a well-off society to an overall well-off one, and there were still many people whose living standards did not reach a well-off level. Many of these people had experienced divorce, including women with children. They were facing financial troubles as well as remarriage difficulties. In order to improve this situation, they choose transnational marriage.

